

## 第14回館長講座 ポンペイを歩く

2017年11月18日

今回もパエストゥムと同様、藤本強・青柳正規編『イタリアの世界文化遺産を歩く』同成社2013での現在群馬県立女子大学准教授の藤沢桜子さんによるポンペイ案内によって説明を行う。説明文は大部分を藤沢桜子さんの書かれたものを引用しているが、藤沢さんの「です・ます調」を「である調」に変えていることをお断りする。

若い頃、考古学を志したからにはぜひ行って見てみたいと思っていたのがエジプトのピラミッドと並んで、このポンペイであった。ピラミッドには今まで訪れる機会がないままにきたが、幸いイタリアでの発掘調査にかかわるようになって、ポンペイには1985年にシチリア島での調査を終えてローマでの数日間の休暇の間に初めて訪れることができた。その後1992年、2000年、2004年、2006年と何回も訪れている。

遺跡の前の通りにポンペイを訪れた考古学者は必ず立ち寄るといふ食堂、イタリではトラットリアといいますか、そこの親父は店に来た考古学者にサインを求め、分厚いサイン帳を持ってくる。大胆にも私もサインをしてきてしまった。

### ヴェスヴィオ山

ヴェスヴィオ山はナポリ市街の東南東にある標高1300m弱の火山で、ポンペイ、エルコラーノ、トッレ・アヌンツィアータなどを埋めた79年の噴火以降も噴火を繰り返し、多くの災害を与えている。北には外輪山のソンマ山もある。ナポリ周辺からよく見えるランドマークとなっている。

登山電車の歌『フニクリ・フニクラ』で知られた山でもあり、1995年に国立公園となり、自然保護が進められている。1944年の最後の噴火で登山電車の運行は廃止されたが、山頂まで登って黒々とした火口をのぞくことができる。

### ポンペイ

ポンペイは79年8月24日にヴェスヴィオ山の噴火で埋った都市である。人口は1万5千人、1.5キロと1キロほどの規模の都市である。

短時間で熱い火山堆積物により埋ったので、当時の暮らしがそのまま遺されている。逃げ惑った人が焼死した様子も遺っている。

調査は18世紀後半から行われ、調査に基づいて復元もなされている。

大噴火は8月24日正午過ぎに起きた。地中を上昇中に急激に冷やされて固まったマグマは、さらに下から上昇してくるマグマの圧力で細かく砕かれ、爆発とともに噴煙柱となって火口から吹き上げられた。高さ14kmと推定される噴煙柱の上には巨大な噴煙が広がっていた。このような噴煙柱を形成する噴火は、小プリニウスにちなんでプリニー式と呼ばれる。

噴煙柱の上に広がる噴煙は風にあおられて南東へのびてゆき、ポンペイやオプロンティスに軽石や灰の雨を降らせた。12時間にわたって降り続け、ポンペイでは最大 2.8 m の厚さで堆積した。夜中になると噴煙柱の高さは最大に達し、噴火様式が変化する。ヴェスヴィオ山は軽石噴出を中断させながら、6回にわたって火砕サージと火砕流を発生させていった。オプロンティスとそれまで火山灰の降下量が少なかったヘルクラネウムを火砕サージが襲い、人々の命を奪った。その後ヘルクラネウムにはさらなる火砕サージと泥土のような火砕流が到達し、街を呑み込んで当時の海岸線を約 400m 先まで西に押し出していった。翌朝、致命的な火砕サージがポンペイを襲い、最後の火砕流が街を覆った。

市街はヴェスヴィオ山を北にして区画整備されていた。ポンペイが城壁に囲まれた都市の形態をとるようになったのは、前 6 世紀であるとされている。

ポンペイはとりたてて歴史に名を残してこなかったとはいえ、繁栄を享受していた地方都市だった。ワイン醸造やオリーブ油の製造、毛織物業が盛んであったのみならず、大プリニウスは『博物誌』のなかでポンペイはガルム（魚醬）で有名であると述べている。これまでに遺跡の 3 分の 2 程度が発掘されており、日本の研究者たちによる発掘調査もおこなわれた。

#### ナポリの国立考古学博物館にある復元模型 1819 年の段階

この街は 16 世紀に河川工事の際に一度掘り当てられたものの、実際の発掘はブルボン王朝のもとで 1748 年に開始された。当初は宝探しの発掘であったが、ガリバルディがイタリアを統一した 1860 年にフィオレリが発掘監督者となってからは「科学的な」発掘となった。遺跡は区画化され、現在の町と同様に建物の戸口にまで番号が付された。

遺骨の周囲にできた火山灰の空洞に石膏を流し込む方法が考案されたのもこの時期で、固まった石膏を取り出すことによって、火山灰が保存していた死者の姿を再現することが可能となった。

#### 囲壁

ポンペイは東西 1200m、南北 650 m、面積 63 ヘクタール余りで、周囲約 3 km の城壁に囲まれた中規模の都市である。市街は周囲を高い石積みの壁で囲まれている。囲壁の外にも居住は認められるが、主な市民生活は囲壁の中で行われていた。囲壁は、特に北側では、たいへん良い状態で連続してみられる。囲壁にはところどころに見張り用と思われる塔が設けられている。囲壁に門があり、他の都市に向かって道路がのびている

ローマ植民都市となってからはポンペイは城壁で都市を防御する必要がなくなり、マリーナ門付近にみられるように都市南西部では城壁と一体になって住宅や浴場が建設された。

#### マリーナ門から公共広場へ

まず、マリーナ門からフォルムへ至る道を歩く。ポンペイを訪れる観光客のほとんどが最初にとおる道筋。

ポンペイ遺跡の入口はいくつかあるが、ここでは市街南西部の「マリーナ門（または海の門）」側から入る。観光客の眼下には奥のアーチに向かう登り坂とその左脇に並ぶ「郊外浴場」の遺構が見える。マリーナ門には 2 つのアーチがありますが、左の小さいものが歩道、右の大きいものが車道。このように街の通りは歩道と車道が区別されていた。

### アポロ神殿

道をさらに進むと、左手にはアポロ神殿への入口があり、矢をつがえる太陽神アポロと月女神ディアナのブロンズ像（コピー、実物はナポリ博蔵）が出迎えてくれる。建物は前 2 世紀のものだが、考古学的な調査からこの地のアポロ信仰は前 6 世紀にまでさかのぼる。

### フォルム

街の中心であるフォルム（公共広場）は今も観光客でにぎわっている。南北 142m、東西 38m の長方形をした広場で、列柱廊に囲まれていた。本来は皇帝や街の有力者たちの肖像が並んでいたのだが、62 年の地震による破損か 79 年の埋没後の回収のために発掘では見つかっていない。

フォロは市民の日常生活の中心の場で、これに面してすべての公共の建物が並び、町の運営、司法による裁き、事業の管理、市場などの商取引が行われたほか、町の信仰の場でもあった。

北端には首都ローマのカピトリウムにちなんで最高神ユピテルと妃ユノー、娘の戦神ミネルヴァを祀る神殿が建っており、その背後にはそびえるヴェスヴィオ山を目にすることができる。

ローマの植民都市に組み入れられてから（紀元前 80 年）、神殿には大きく手が加えられて正真正銘のカピトリウムに生まれ変わり、ジュピター、ユノー、ミネルヴァの三神の像が祀られ、ローマのカピトリウムに準じて整備された。高い基壇の上に建ち、フォロを通る誰の目にも入る建築だった。

### バシリカ

広場は公共生活を営むうえで重要な施設に取り囲まれている。西側には裁判や商取引が行われていた延べ面積 1500 平方メートルに及ぶバジリカは、フォロの区域で最大の建物で、裁判や商取引に使われていた。

内部はレンガでできたイオニア式の柱頭を持つ 2 列の円柱によって 3 つの廊に分かれている。バジリカの建設時期は紀元前 130-20 年頃と推定され、このタイプの建築としては、古代ローマ世界の中でも最も古い建物の一つ。19 世紀にフォロの区域で発掘調査が始まった時代にこの建物も掘り出された。

### エウマキアの建物

東側には「エウマキアの建物」（ヴィーナスの巫女であったエウマキアによって建設された毛織物業組合の建物）がある。

フォロの東側部分で最も大きなこの建物は、ポンペイの裕福な家柄の出身で女神ヴィーナスを祭る女祭司であったエウマキアが皇帝を礼賛のために建てさせたもの。

### ウェスパシアヌス神殿

ウェスパシアヌス神殿（皇帝神殿）はアウグストゥスの守護神の神殿。

### 穀物市場（現在は倉庫）＝フォロの穀物倉

カピトリウム神殿を挟んで西側には、穀物市場（現在は倉庫）＝フォロの穀物倉がある。フォロの西側に広がり、レンガの柱で仕切られた 8 つの開口部を持つ建物で、果物と野菜の市場として使われていた。今日ではポンペイ最大の考古学品の倉庫として使われ、1800 年代の終わりからこの都市で行われてきた発掘による出土品 9 千点以上がここに保管されている。

### 公共広場からエルコラーノ門外へ

カピトリウム神殿奥の両脇にあるアーチをくぐり抜けると、右手にはフォルトゥナ・アウグスタ神殿、左手にはフォルム浴場がある。この神殿は皇帝一族の運命の女神フォルトゥナを祀っており、初代皇帝アウグストゥス時代に街の有力者によって建設された。ここから東へとフォルトゥナ通りが続く。写真の男性がのっている楕円形の飛び石は現在の横断歩道にあたり、両側の歩道をつないでいる。荷車が通る車道には轍の跡が 2 筋の溝になって残っている。車道は中央が盛り上がっているが、これは排水の便をよくするために、歩道の下には排水溝が設けられていた。

### フォルム浴場

ポンペイには遺跡入口の郊外浴場、このフォルム浴場、サルノ浴場、もっとも古いスタビア浴場、中央浴場の公共浴場が 5 ヶ所確認されているが、地震被害や建設中で 79 年の埋没時に営業していたのは唯一この浴場であったようだ。

フォルム浴場はジュピター神殿の後ろに位置し、ポンペイがローマの植民都市となって（紀元前 80 年）間もなく建設された。

### 悲劇詩人の家

フォルム浴場に北面している邸宅の玄関の床モザイクは CAVE CANEM（犬に注意）という言葉入りで、鎖につながれた番犬が牙をむき出している。演劇の場面をあらわしたモ

ザイクが発見されたことから「悲劇詩人の家」と呼ばれている邸宅。この猛犬注意のモザイクは、タルクィニアの町の家の門にも貼ってあるのを見かけた。

#### エルコラーノ門外のモニュメント

この邸宅を右手にさらに西へ進むと突き当りに出る。南北を走る通りを北上していくとエルコラーノ門があり、道はそこから城壁外へと続き、オプロンティスやヘルクラネウムへと通じていた。城壁外の道は墓通りになっている。古代ローマ人は城壁内に墓を建てることはなかった。通りを行く人々を印象づけるため、列柱が円になって立つ墓や祭壇型の墓などモニュメンタルなものが目立つ。

城壁外には別荘も建てられていました。城壁内の富裕層の住宅をドムス（邸宅）というのに対し、城壁外のもはウィラ（別荘）といいます。別荘といえば今の感覚では単純に余暇を楽しむところというイメージがあるかもしれないが、古代ローマ時代の別荘は自給自足体制を基本としてまかなわれており、主人が余暇を過ごしに来ていなくても農作業などがおこなわれていた。

#### 秘儀荘

エルコラーノ門外から 300m ほど離れた場所に「秘儀荘」がある。62年の地震による被害のために以前の別荘全体の優雅さは失われたものの、この別荘にはポンペイ壁画を代表する傑作が残されている。

ディオニソスの秘儀の場面を現した壁画があり、それに因んでこの名称で呼ばれている。

壁画は部屋の 3 面の壁に描かれており、その保存状況の良さと絵の質の高さで、ローマ絵画の代表作とされている。

壁画の描かれた部屋自体も「秘儀の間」と呼ばれている。壁画では色大理石板を模した赤い長方形パネルを背景にほぼ等身大の人物が台の上に並んでいるが、ここにはディオニソス秘儀の入信儀式の一部始終が描かれているとされている。

#### 城壁沿いから市街の邸宅へ

エルコラーノ門まで戻ってきたところで城壁の外側に沿って東へ進む。この一帯の城壁は良い状態で保存されていて、城壁には間隔をおいて見張り塔が設置されており、東西南北のメインストリートと接する 7 箇所には城門が設けられていた。

#### メルクリウスの塔

見張り塔ではもっとも保存状態の良い通称「メルクリウスの塔」は、フォルムの北を走る閑静な「メルクリウス通り」の北端にある。

#### ヴェッティの家

富裕な解放奴隷ウェッティウス兄弟の邸宅とされる「ヴェッティの家」がある。62年の地震後に大改修されており、ポンペイ最終期の邸宅を知るうえでも重要な邸宅。部屋を装飾する壁画は第4様式の代表的な作例であり、邸宅の奥には噴水や彫刻を配した美しい列柱式中庭がある。

### ファウノの家

ヴェッティの家の南西には街区全体を占める古風な大邸宅ファウノの家がある。邸宅名はここで発見された踊るファウヌ（牧神）のブロンズ像（ナポリ博蔵）に由来している。立派な門構えの正面玄関はフォルトゥナ通りに面しており、玄関前の歩道には石のタイルを並べて「ハウエ HAVE（ようこそ）」とラテン語による挨拶の言葉が綴られている。床を飾っていた色彩豊かなモザイクの多くはナポリ国立博物館の「ファウヌの間」で見ることができ、玄関通路の次に配された広間には、雨水受け中央にファウヌ像のコピーがおかれている。邸宅名の由来となったこの像は、実際には雨水受けの縁で発見された。

ひとつ部屋をおいたその横には、4本の柱によって天窓が支えるタイプの広間もある。ファウヌのいる広間の奥には列柱式中庭があり、さらにその奥にはさらに大きい列柱式中庭が広がっている。2つの中庭に挟まれた眺めのよい部屋には、マケドニア王アレクサンドロスとペルシア王ダレイオス3世の戦闘場面をあらわしたアレキサンダーモザイクと通称される巨大な床モザイク（ナポリ博蔵）のコピーがあります。原作は前3世紀頃のギリシア絵画であるとされており、ミリ単位の細片がもちいられています。

### 街の裏角へ フォルトゥナ通り・パン屋・娼婦の家

西アジア、ギリシアで粉屋は古く出現する。製粉は重労働であり、多くの時間を割く必要があったであろう。同様にパン作りはやはり多くの時間を必要とするのでギリシアの諸都市にはパン屋があったとされる。ローマでもパン屋の存在は知られており、具体的な証拠がポンペイにある。

フォルトゥナ通りからやや曲がった小道を南に歩いていくと角に見えてくる「ポピディウス・プリスクスのパン屋」もそのひとつ。ここには売り場はなく、製造されたパンは卸売りに出されていたようだ。

製造所には小麦粉をつくるための大きな石臼が並んでいる。臼の横穴には木の棒が水平に差し込まれており、それにつながれたラバやロバが周囲をめぐることで臼を回していた。石臼の隣にはパン焼き窯が建っていて、窯の内部はピザ焼き窯のようにドーム型になっている。ポンペイやヘルクラネウムからは炭化したパンが発見されている。パンは円形で8等分の切れ目が入っており、やはり同様の形をしたパンが壁画にも描かれている。

パン屋のある街区の南の街区には娼館（ルパナール）がある。フォルムから東に走る大通りアボンダンツァ通りと南北に走る大通りスタビア通りに面してスタビア浴場があるが、その浴場の西を通る小道に面して建てられている。アボンダンツァ通りの曲がり角の石畳

には、娼館の場所を示す男根マークが彫られている。2階建ての建物を入ると小さな広間を小部屋が取り囲んでおり、広間の壁にはエロティックな絵が描かれている。小部屋の壁には愛の言葉などを綴った引っ掻き文字（グラフィート）の落書きが残っている。喜怒哀楽にあふれる生きいきとした落書きは街のいたる所で発見されている。なお、古代ローマでは売春は公然とおこなわれていたが、売春業は不名誉な職業だった。

### 浴場施設 スタビア浴場

娼館前の小道「娼館通り」を南下するとスタビア浴場がある。現在残る建物は前2世紀のものだが、創建は前4世紀にまでさかのぼる。

アボンダンツァ通りに面した正面入り口を入ると列柱廊に囲まれた運動場が広がり、奥にはプールもあった。女湯は燃焼室の反対側に男湯と隔てられて設けられており、建物西の脇道に女湯専用の入口がある。

入浴方法については、厳密な作法があったわけではないが、脱衣室で服をしまつて香油を身体に塗り、熱浴室で発汗をうながして熱い湯につかり、冷浴室で身体のはつりをとっていたようだ。温浴室は身体をならすのに役立った。屋外の運動場で球技や水泳などを楽しむこともできた。公共浴場は人々の社交場にもなっていた。なお、浴場は公共施設ばかりではなく、個人的に浴室を備えた邸宅もあった。

### 三角広場

この地区には「三角広場」、大劇場、小劇場または音楽堂（オデイオン）、体育場、エジプト由来の女神イシス神殿があり、目にする建物の多くは前2世紀に建設された。

「三角広場」の名称は、広場がまさに三角形をしていることに由来している。広場を取り囲む列柱は前2世紀に建設されたものだが、奥に残る神殿跡は都市ポンペイの初期にあたる前6世紀初頭にまでさかのぼり、当時信仰の篤かったヘラクレスとアテナに捧げられたものとされている。

### 大劇場

大劇場は前2世紀の創建だが、アウグストゥス時代にホルコニウス一族によって修復された。大劇場にはすり鉢状の階段席がついていて、かつては約5000人の観客を収容できた。

イタリアでは現在でも遺跡が劇場として使われている。ちょっと古い話だが、1960年のローマオリンピックでは、ローマに残る遺構が利用された。アッピア街道を走ったマラソンのゴールはアベベが裸足でトラヤヌス帝の凱旋門をくぐってゴールしたし、日本が団体で優勝し、また小野喬が鉄棒で金メダルを取った体操競技はカラカラ帝の浴場跡で行われた。

### 小劇場

小劇場は、ポンペイがローマ植民都市となった頃に 2 人の公職者たちの私費によって建設され、屋根つきの建物で、約 2000 人の観客を収容できた。

### 剣闘士の訓練場

大劇場に隣接した列柱廊の広場は、幕間や雨に際に観が休む場所として小劇場と同時代に建設されたものだが、剣闘士たちの武器が出土していることから、後 62 年の地震後は剣闘士たちの訓練所となっていたようだ。

### イシス神殿

大劇場の北側にイシス神殿がある。発掘された当時、イシス神殿は装飾や備品がほとんど当時のままに残っていて、その姿はポンペイを世界中に知らせるのに貢献した。イシス信仰はエジプト起源の非常に古い女神信仰で、紀元前 3 世紀頃から地中海全域に広まり、信者だけに限定された秘儀信仰であった。

### アボンダンツァ通り

公共広場から東のサルノ門までアボンダンツァ通りが続く。南北の大通りスタビア通りと交差する「ホルコニウスの交差点」から東には、さまざまな商店や工房が軒を連ねていた。

### 食堂、居酒屋

フォロ周辺、幹線街路沿いなどの人通りの多い街のあちらこちらに食堂あるいは居酒屋とされている店がある。街路に面していて、カウンター風の台がある。そこに大型の土器があることが多い。こうした店が数多くあることは外食が盛んであったことを示している。これらからポンペイの人々の暮らし振りがうかがえる。

L字型のカウンターがついた飲食店も見受けられ、カウンターに埋め込まれた大甕には食べ物や飲み物が入っていたようだ。壁際には炉も設置されていました。店の奥の壁に描かれた神棚には、家の守護神たちや商業神メルクリウス、酒神バッカス、また善き魂の蛇神が描かれている。

### 外壁の選挙推薦文

通りに面した外壁には店の看板や神々の姿も描かれたが、白い漆喰壁に赤く筆書きされた選挙広告も多く掲示されていた。選挙は立候補制ではなく、推薦によって候補者が立てられた。街の有力者を毛織物業者やパン製造業者、製材業者などさまざまな同業組合が推薦している。有権者は成年男子市民に限られていたが、飲食店の女主人による推薦文も見つかっている。この推薦文ではある商人が、都市行政に携わる最高の公職者として、2 人の候補者を支持しているのがわかる。



### 貝殻のヴィーナスの家

アボンダンツァ通りに面して邸宅もあった。選挙候補者であった人物の「ユリウス・ポリュビウスの家」や庭園画で知られる「果樹園の家」、庭園に貝殻の上で横たわるヴィーナスの壁画がある「貝殻のヴィーナスの家」などがある。

### 逃避者たちの庭

南のヌケリア門付近にある建物の庭園では、1961年の発掘においてあらたに犠牲者たちの存在が知られることとなった。19世紀に考案された石膏を流し込む方法によって、庭の壁沿いから子供も含む13人の遺体がまとまって発見されたのである。皆で逃げる途中に被害に遭ったのだろう。そのためこの場所は「避難者たちの庭」と呼ばれており、当時の惨状を伝える証言者として今でも彼らが横たわっている。石膏像のようにも見えるが、その中には遺骨がある。火山灰が保存していた最期の姿を再現した石膏遺体なのだ。彼らは約3m近く堆積した軽石の上から発見されており、そのことは軽石が降り積もった後に襲ってきた火砕サージによって彼らが命を奪われたことを物語っている。

### 大体育場と円形闘技場

街の東の隅にある大体育場はアウグストゥス帝時代に若者たちが身体を鍛錬するために建設された。

その隣には円形闘技場がそびえている。小劇場を建設した二人委員たちが前70年にやはり私費で建設したもので、現存して建つ最古の円形闘技場とされている。平面プランは楕円形をしており、中央舞台を階段状の観客席が取り囲んでいる。約2万人の観客を収容できたと言われるこの建物では、剣闘士試合や野獣狩りの見世物が開催されていた。

闘技場では外壁の修復の様子に目がいった。赤いきれいな煉瓦は現代の修復によるものだろうが、2000年前のものの方がものが良く、現代のものはすでに欠けてきていた。

### 現代のポンペイの町

ポンペイの案内を書いた藤沢桜子さんは、最後につきのように締めくくっています。

「さて、遺跡から一歩外に出れば、現代のポンペイの街が待っています。通りには土産物屋などの商店がずらりと並び、行き交う人々で賑わっていて、突然現実に引き戻されたような、アボンダンツァ通りの続きのような妙な違和感すら抱きます。ポンペイは古代遺跡ばかりではありません。19世紀末に建設された聖堂「ポンペイのロザリオの乙女」は、イタリア有数の聖母巡礼の地となっています。」

遺跡の外には現代の人々の生活の場があります。この町にも何回か泊まりましたが、町自体はローマやフィレンツェのような観光地にありがちな喧噪もなく、スリの心配もあまりなく、いいところでした。ポンペイを観光されるなら、ツアーでのローマからの半日旅

行も結構ですが、できればこの町に泊まれて、イタリアの小都市の雰囲気も味わってみたら、とおすすめします。